

〔論 文〕

中国古代の都城と「北」という概念

——文化的テキストと文化的実践の差異から、
中国の古代都市文化の一視角を探って——

陳 力

中国古代において、都城の方位に関するもっとも重要な問題は二つある。一つ目は、「天下の中」と都城との関係である。二つ目は、都城を東西南北の方位に沿って正しく建設することである。この二つの問題は、どちらも中国古代の文化的天文学と密接な関連を持っている。

I 都市と「都市のへそ」・「世界軸」、 もしくは「天下の中」

1. 西洋古代の「都市のへそ」・「世界軸」と いう概念の移り変わり

M.カステル氏 (Manuel Castells) は「都市文化は人間の空間の歴史をイデオロギー的に物語るゆえに、厳密に言えば、神話である」と指摘している¹⁾。確かに東西を問わず、古代の都市 (あるいは都城) は様々な神話的ベールに包まれている。例えば、ギリシア・ローマ時代の地中海沿岸の都市には、「都市のへそ (Navel of the City)」というものが存在していた。「都市のへそ」は、そのほとんどが彫刻が施された石の構造物であり、オンパロス (Omphalos) などの名前と呼ばれている。ローマ時代 (前2世紀) の石とレンガなどで作られた「ローマ城のへそ」の遺跡は、現在でも有名な観光スポットである。

『ブルタルコス』には、ロムルスがローマ城を建設するとき、「みんなが故郷から持ってきた土をかき混ぜて、Mundusという穴に捨ててもらった。この穴は天国と同じ名前があり、そしてこの穴を中心にしてローマを一つの円周のなかに収めた」との記録がある²⁾。各都市は自分

の都市こそ、天と特別な繋がりがあり、天地人の間のパワーが交流する「へそ」が自分の都市にあると考えていたようである。

このような考え方は、原始的な蓋天思想からきた慣行であろう。なぜなら、人類が視覚を使って天と地を観測するとき、天はドーム状で自分の頂上はもっとも高くみえ、この天球ドームのもっとも高いところに神秘の力があり、それがちょうど自分の都市の真上なので、自分の都市が天と尋常ではない関係をもっていると信じ込んでいたのである。

しかし、都市国家が拡大するにつれ、もしくは都市国家が帝国へ変貌する時、貿易や戦争などで人類の移動範囲はより広くなり、旅先でも自分が立つ位置の天がもっとも高くみえる。この知識が広く知られるようになり、次第に政治・軍事・文化の力の介入によって、各都市にある「都市のへそ」が整合され、最終的に政治力・軍事力・文化力がもっとも強い都市で、世界の中心である「世界のへそ」が作られるようになる。前6世紀の古代ギリシアはこのような時代であり、海外に大量の入植者が流出して植民都市の建設が盛んになった。前6世紀のすぐ後に活躍していた古代ギリシアの哲学者のアナクシマンドロス (Anaximandros) は、ギリシアが世界の中心だと考えていた³⁾。認識論に留まるだけではなく、「都市のへそ」と同じように「世界のへそ」を可視化する動きも起きた。先述した「ローマ城のへそ」がアウグストゥス時代にミリアリウム・アウレウム (Miliarium Aureum) に取り替えられ、世界の中心とみなされた。フランチェスコ・リッツァーニとラウ

ラ・リッカ両氏はこのような「都市のへそ」やデルポイ (Delphi)・ローマのミリアリウム・アウレウムは、「世界の中心、さらには、宇宙の中心の紋章であった」と指摘し、「アクシス・ムンディ (世界の軸) の原型とつながっている」と考えている⁴⁾。つまり、いわゆる「世界の中心」という考え方は、時代によって変動するのであり、また東洋西洋を問わず古代に存在していた考え方である。帝国時代になると、いわゆる「世界の中心」は、往々にして帝国の政治的・文化的中心と関係し、それ以前の各都市の「世界の中心」は次第に無視・忘却されるようになったのである。

「ローマのへそ」に関する記載でわかるように、このような「世界軸」は天国と同じような名前が付けられた。つまり「世界軸」は、天と繋がりがあつた存在であったと考えられる。このように、自分の頭上の天空を宇宙の中心と考え、自分が生まれ育つた土地を世界の中心と考えるのは、原始天文学が発生した時期にはよくあることである、もちろん、後述するように古代中国にもこのような考えが存在していた。古代の東方においては、このような天地人のパワーの繋がりを「軸」の形で具像化して考えている。「軸」の上端は神の世界、その中端や下端は人間の世界とされている。まさにドイツの哲学者であるエルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer) が言ったように「人間はよく自分の生活の範囲を世界の中心と見做し、そしてその特別な個人生活を宇宙の標準にする」とのことである⁵⁾。

2. 戦国時代までの「天」・「極」・「北辰」と「中」の概念——古典的文献の記録

『説文解字』一部に「天、顛也。至高無上、従一大」とあり、また『説文解字注』六篇上木部に、「極、棟也。(中略)、三輔名梁為極」とあり、さらに「棟、極也。極者、謂屋至高之処。(『易』) 繫辭曰、上棟下宇、五架之屋、正中曰棟。『釈名』曰、棟、中也。居屋之中」とある。「中」は後述するように、その本来の意味するところは、時間・方位・節句を測量するための道具であるノーモ

ン(表)の象形文字である。

前掲史料でわかるように、「極」の本義は家屋の最も高くして真ん中にある梁である。次第にこの意味が原始的な宗教や文化的天文学まで広がり、極が自分の頂上の特別な宇宙に指す言葉になった(図2a・b参照)。

中国では「天」は古くから神の所在とされていた。甲骨文の「天」という字は「上」(上)の形で、その字形からみてわかるように、この「天」は自分の頂上に存在する神である。殷の前期に「天」も重視されていたが、殷の中期から晩期になると、国家宗教のなかでは自然神の「天」よりも先祖神の「帝」がより重視されるようになったと考えられている⁶⁾。西周になってから「天」がはじめて最高神の概念として使われ、特に西周時代の中期以後、天の内包は以前より豊富になった。『逸周書』度邑に、

王曰、予克致(志)天之明命、定天保、依天室、志共我惡、俾從殷王紂、四方赤宜未(亦肯來)定我於西土。我維(惟)顛服、及德之方明。とある。また、

王曰、嗚呼、且、我罔夷茲殷、其惟依天、其有憲今、求茲無遠、慮天有求繹、相我不難、自洛汭延於伊汭、居陽無固、其有夏之居、(中略)、宛瞻過於伊洛、無遠天室。

とあり、これらの史料は周の武王が「天」という最高神からの「天保」を確実に得るために、「天室」の近くで新都を作りたいとした史実の記録である。そして最高神の居場所である「天室」は、伊洛エリアにあるという考えを示している⁷⁾。これは、北方の宇宙にある天極は最高神や「道」の所在だという戦国秦漢時代の思想とは異なる。

東周時代になると、このような考えに次第に変化が起きた。平勢隆郎氏は地域的領土国家の時代である戦国時代に、いくつかの文化圏の中心を原点とする畿服制度があり、そこからいくつかの「天下の中」があるという考えが存在していたと指摘している⁸⁾。それを簡単に例えるなら、華夏の世界は『左氏伝』の記載のように「東土」・「夏(中域)」・「西土」に分けられていた。

そして、北狄の中山や南方の楚にも自分たちの文化的伝承によって、自分なりの「天下」の概念を持ち、自分の「天下の中」に関する考えをもっていた、ということになる。

戦国時代になお存続していた正統的な西周の文化を継承してきた两周が考える「天下の中」について、潘明娟氏は「地中・土中・天下之中概念の演変与認同——基於西周洛邑都城選址実践的考察」⁹⁾において、これまで混同していた「地中」・「土中」・「天下の中」の概念を整理・区分し、興味深い結論を出しているが、この研究は基本的に周文化の視点から検討を展開しているので、東周の時中国にすでに存在するその他の文化圏の関連状況には触れていない。あくまでも筆者の関心においては、上述した平勢氏の考えが非常に示唆的である。

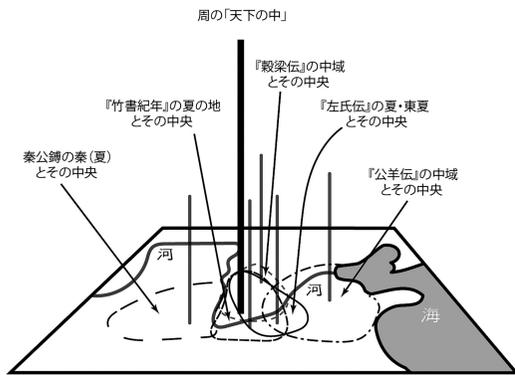


図1 平勢氏が指摘した様々な「夏地」とその中央

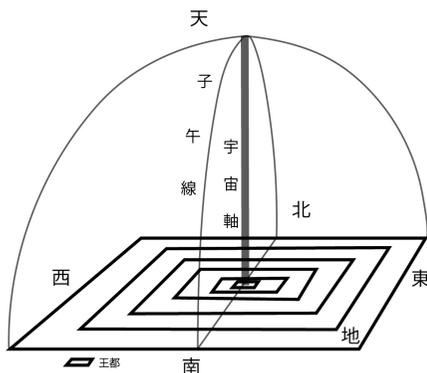


図2a 妹尾氏が考えた王都と宇宙

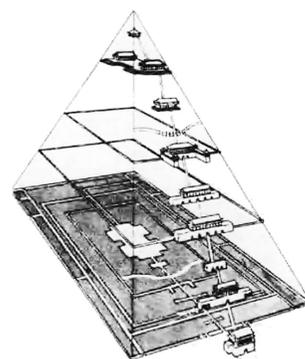


図2b Kevin Andrew Lynch氏が考えた中国古代の都市と宇宙

『尚書』康誥によれば、西周の建国前後、周人はその首都である豊・鎬の所在地を「西土」と呼んでいた。『左氏伝』昭公九年に、

(周)王使詹桓伯辭於晉曰、我自夏以后稷、魏・駘・芮・岐・畢、吾西土也。及武王克商、蒲姑・商奄、吾東土也。巴濮・楚鄧、吾南土也。肅慎・燕・亳、吾北土也。

とあり、この習慣は春秋時代まで持続していたことがわかる。つまり、宗周地区は「西」と考えられていたのである。西周初期の「中或(域・國)」は現代の洛陽平原周辺であり、つまり洛陽は「天下の中」として捉えられていた。このような考え方は殷の「四方」の概念と関連があると考えられるよりも、そもそも、周人の故郷は現在の山西省南西部や河南西部にあり、この伝説中の夏墟から西遷して現在の関中地区にたどり着いたので、自分の故郷である「夏」の地を「天下の中」として考えたというのが、その理由かもしれない。『詩経』大雅文王之什の「豳」・「皇矣」からも周人のこのような概念が確認できる。現在の洛陽平原が「天下の中」と見做され、宗廟の所在地や都である宗周の所在地の関中中部は「天下の中」ではなかった。これも非常に興味深いことである。この理由は政治的なものであろうが、歴史的・文化的な認識でもあったとおもわれる。

既存考古資料からみて、夏という王朝が実在したとすると、その中心部は洛陽平原にある可

能性が高い。張光直氏に指摘されるように、この「夏」・「中域（國）」の中心部には、嵩山という三代の聖なる山があり¹⁰⁾、天室の象徴とされていた。「夏集団」はここで最初に圭表をつかって太陽の影を観測して暦を定め、行星など天文観測を綿密に行ったという¹¹⁾。

しかし、夏と異なる文化ルーツを持つ殷の「天下の中」は現在の洛陽平原ではなく、現在の安陽にある。『詩経』殷武に「商邑翼翼，四方之極」とあり、その鄭注には「極，中也」と解釈している。又『爾雅』釈言に「殷，齊，中也」もある。これらの記載からみれば、周王朝が考えた「天下の中」と殷の「天下の中」との間には、変化と差異がある、つまり、いわゆる「天下の中」は政治・文化の流変によって変動していたと考えられ、このような史実も平勢氏の考えに合致する。

各文化の「天下の中」と神との関係については、平勢氏がすでに指摘している。東周時代になると、王朝や諸侯国には、それを象徴する星である「大辰」が存在していると考えられるようになった。これらの大辰は二十八宿に属する明るい星である。しかし、天極について、潘明娟氏が指摘したように天極星が天の中心である認識は、上古時期の人々はある程度もっているが、明確な文字による記述はなく、まだ「自覚的概念」までなっていなかった。文献上の「天極星」を「極」にする認識に関わる記録は、現在の段階ではなさそうである。

大辰について、『左氏伝』昭公二十五年に、

二十五年，鄭使子産（中略），対曰，高辛氏有二子。長曰閼伯，季曰実沈，居曠林，不相能也，日操干戈以相征伐。后帝弗臧，遷閼伯於商丘，主辰，商人是因，故辰為商星。遷実沈於大夏，主參，唐人是因，服事夏・商，其季世曰唐叔虞。當武王邑姜方娠大叔，夢帝謂己，「余命而子曰虞，乃与之唐，属之參而蕃育其子孫。」及生有文在其掌曰「虞」，遂以命之。及成王滅唐而国大（太）叔焉。故參為晋星。

とあり、『爾雅』釈天に、

大辰，房心尾也。大火謂之大辰。（中略）大

梁，昴也。（中略）北極謂之北辰。

とあり、『公羊伝』昭公十七年に、

大辰者何，大火也。大火為大辰。伐（つまり参宿）為大辰，北辰亦為大辰。

とある。『論語』為政に、

為政以德，譬如北辰，居其所，而衆星共之。

とあり、これらの記載からみれば、前五世紀後半までには、夏の大辰が参宿、殷の大辰が心宿と認識され、ほかに、北辰も大辰だと認識されていた。記載がはっきりしていない部分が多いが、周の大辰がおそらく北辰（天極星＝帝星）ではないかと推測する。そして西周の諸侯国の晋も参宿を自国の大辰にしていた。

以上の北辰も大辰である記載は、いずれも東周時代の記録である。つまり春秋時代になってから天極星（帝星）も大辰として認められるようになったと解釈できる。天極星（帝星）が周王の象徴であれば、最高神の「天」の象徴が別途に定める必要が出てくる。後に詳しく述べるが、東周時代になると、天極星（帝星）は宇宙の中心ではなく、宇宙の中心は星のない天極付近の空間であるという知識を得たので、次第に「道」・「天」の居場所が天極に移され、人間世界を統括する周王の象徴が天極星（帝星）にしたのではないかと推測する（図4参照）。戦国末期にな

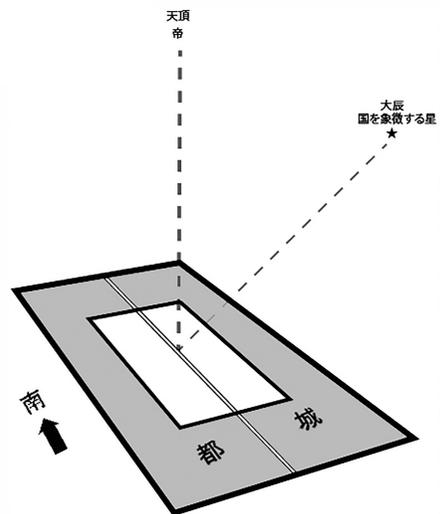
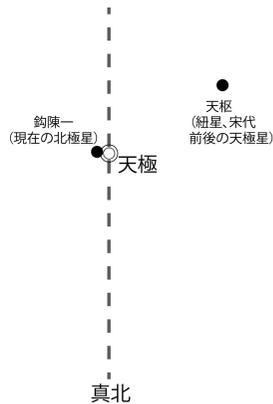


図3 西周早朝の天頂・帝・大辰と都城

Mar. 2022

中国古代の都城と「北」という概念



視野81°

図4 2020年12月23日3時前後の北極星付近

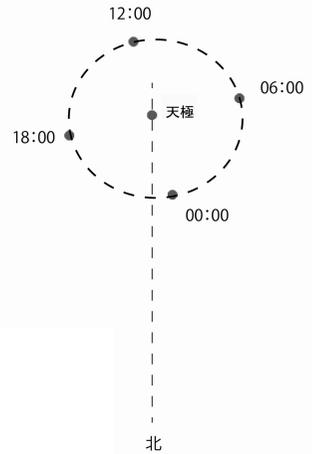


図5 前202年冬至日帝星24時間移動の軌跡

るとこのような考えの方が、むしろ正統派となり、自分の頂上に最高神がある考えは消滅した(図3・図7参照)。

戦国時代まで、星と都城の関係については不明なところが多い。『爾雅』に、

大梁，昴。

とあり、『史記』卷二七に、

昴・畢之間，日・月・五星出入要道，若津梁也。

とあり、『漢書』卷二七上五行志に、

顓頊以水王，陳其族也。今茲歲歲在星紀，後五年在大梁。大梁，昴也。金為水宗，得其宗而昌，故曰「五年陳將復封」。

とある。東周時代において、中国中心部の交通の津梁とされていた都城は魏国の大梁であり、大梁は昴宿の大地での投影として考えられたようである。もしこの推測が正しければ、二十八宿の一つである昴は東周の魏国の大辰である可能性が出てくる。しかし、「大梁」という星の名称は、現存の『石氏星経』・『甘氏星経』には記録されていない。『爾雅』に記録された大梁という星の名称が、どの文化に属する呼び方であるのかは、さらに研究する必要がある。

以上をまとめると、少なくとも管見の限り、西周早期においては都城をできるだけ最高神に近い場所に置く考えがあり、天極星と都城をリ

ンクさせるという考えはなさそうである。そして北辰(帝星)は西周の大辰である可能性があり、このような考え方はいつ発生したのかは不明である。

東周時代になると、天極星(中国上古時代は帝星とも呼ぶ、現代名は小熊座β、以下「帝星」と呼ぶ)と天極(現代の北天極=赤緯+90°、以下「天極」と呼ぶ)を区分するようになった。下引『呂氏春秋』の「極星与天俱遊，而天極不移」の記載からみれば、戦国時代には、最高神所在の「天極」(「無」の宇宙の中心)と帝星(極星、人間の王の象徴、「有」の世界の中心)を区分する意識ができ、帝星が重視されるようになったのではないかとおもわれる。

3. 「中」と「極」の分離

前述したように、西周時代には文化的天文学にある「中」や「極」は、いずれも王室観測者の天頂である。しかし、戦国時代になると、「中」と「極」をはっきり分けるようになった。その原因は二十八宿システムの成立である。

『呂氏春秋』卷十三有始覽に

天有九野，(中略)，何謂九野，中央曰鈞天，其星角・亢・氏。東方曰蒼天，其星房・心・尾。東北曰變天，其星箕・斗・牽牛。北方曰玄天，其星婺女・虚・危・營室。西北曰幽天，其星

東壁・奎・婁。西方曰顛天，其星胃・昴・畢。西南曰朱天，其星觜・參・東井。南方曰炎天，其星輿鬼・柳・七星。東南曰陽天，其星張・翼・軫。

とあり、「天の中」は天極星あたりではなく、二十八宿の角・亢・氐の範囲だとされている。また、

極星与天俱遊，而天極不移。冬至日行遠道，周行四極，命曰玄明。夏至日行近道，乃參於上。当樞之下無昼夜。

とある。この記載からわかるように、呂不韋の時代には、「天の中」の概念が「天極」や「極星」の概念と異なるようになったのである。つまり、二十八宿システムの成立により、以前の天頂を「中」と「極」と認めた古い文化的天文学で

はなく、天極が北方の天空にあるという観点をもつ新しい文化的天文学ができたのである。この新しい文化的天文学においては、「中天」と「天極」は異なるものである。中央鈞天の星である角・亢・氐が大地での映写する地域（星分野）について、『史記』卷二七天官書に

二十八舍主十二州，『正義』，二十八舍，謂東方角・亢・氐・房・心・尾・箕。北方斗・牛・女・虛・危・室・壁。西方奎・婁・胃・昴・畢・觜・參・南方井・鬼・柳・星・張・翼・軫。『星経』云，「角・亢，鄭之分野，兗州。氐・房・心，宋之分野」

とあり、つまり東周の東隣、鄭国と宋国の西部である。『漢書』天文志に、

角・亢・氐，沆（兗）州。

とあり、その星分野を黄河と済水の間エリアに当てている。前述した平勢氏の見解から見れば、魏国出身の『星経』の作者はこのように「天の中」を地上に映写することを考えても当然である。このような中心に対する考え方の中身をみれば、中心とされる地域はそれほど変わっていないが、その地域を中心地とする原理に関わる説話は完全に変わったのである。

しかしながら、『呂氏春秋』には、「当樞之下無昼夜。白民之南，建木之下，日中無影，呼而无響，盖天地之中也」と、古い文化的天文学の伝統も残存している。雑家とされる『呂氏春秋』にこのような現象があることは、文化が発展していく際の複雑性を示している。

『史記』卷六始皇帝本紀に、

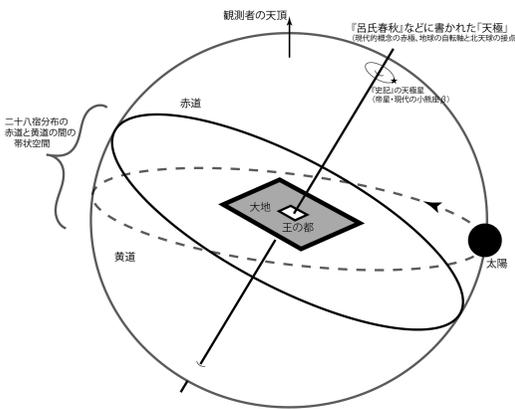


図6 蓋天説から渾天説への移行期の都城と宇宙のイメージ

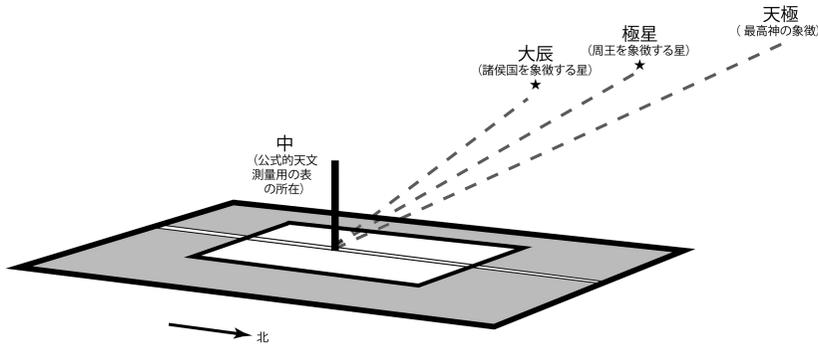


図7 東周時期の天極・極星・大辰のイメージ

二十七年（前220）、始皇巡隴西・北地，出鷄頭山，過回中。焉作信宮渭南，已更命信宮為極廟，象天極。自極廟道通鄜山，作甘泉前殿。築甬道，自咸陽屬之。

とあり、この極廟が現代の北極星に当たると考える学者が多いが、実際はそうではあるまい。なぜなら、前述したように『呂氏春秋』では、「天極」と「極星（帝星）」を分けて考えているのである。天極は現代の考えで言えば赤緯 + 90°であり、そこは「無」の宇宙である（図6・図7参照）。

天極星について、『史記』卷二七に「中宮天極星，其一明者，太一常居也」とある。『老子』四十二章に「道生一，一生二，二生三，三生万物」とあり、「道」と「一（太一）」との関係を示している。もっと明確にこの両者を区別してその役割を記録している史料としては、郭店楚簡『太一生水』が挙げられるが、ここは贅言しない¹²⁾。

4. 本章のまとめ

以上の「中」・「極」と「天」（最高神の所在）の考えを整理すれば、殷周時代から戦国時代までの人々の、自分と宇宙との繋がりを可視化する過程は、次のように纏められる。殷と西周時代には「天」に「極」が存在し、この「極」が自分の頂上だと考えられた。また、「中」という字の象形からわかるように、この「中」は公式的に暦を作るための観測所付近の場所で、つまり国家公認の観測用の「表」を建てた場所が「中」である。つまり「中」は地上の「極」と理解してもいいかもしれない。

一方、東周時代になると、各王朝や主要諸侯国にはそれぞれ自分を象徴する星宿があり、これが「大辰」である。東周時代には、二十八宿システムの文化的天文学が次第に完熟し、「天極星」（帝星）が天極を中心点にして円形の視運動をすることも発見されたため、「天極」を最高神の所在とし、北辰（帝星）は次第に人間世界の最高権力者の象徴になったのではないかとおもわれる。

しかし、知識が発展するスピードに比べて、

文化の更新には滞後的な特徴があることからみれば、「中」と「極」と「天極」を分けて考える思想が生まれても、「天下の中」＝「天の中」は洛陽にあるという説も、当時の中国社会に依然として併存し続けていたとおもわれる。

Ⅱ 中国古代の「北」とその測定方法——理想的な「北」を割り出す方法の文化的テキストの違いからみえる都城方位の「意義」

中国古代の都城において、「南」と「北」の方位はとても重要である。『史記』卷二夏本紀には、

禹於是遂即天子位，南面朝天下，国号曰夏后，姓姁氏。

とあり、『史記』卷六秦始皇帝本紀にも、

秦併海内，兼諸侯，南面称帝。

とあり、方位と支配権顯示が密接な関係にあることが示されている。

北半球の自然的制約から、「南」は、まず「北」を割り出してから決めるのが一般的であり、すなわち「北」をいかに正しく測定し確定するかが重要な鍵となる。

現代の「北」という方位には、真北と磁北の違いがある。いわゆる真北は、天極に向く方位である。GPS設備が普及する以前は、古代遺跡の地図を作る際に「北」という方位を割り出すには、磁北を測ってその角度から偏角を除くか、精密地図で割り出す方眼北か、大地測量システムの平面直角座標系の標識より割り出すか、などさまざまな方法があった。GPSシステムが普及した現在、真北は衛星システムのArithmetic（計算法）で算出し、電子信号としてGPS設備に伝送され、利用者はそのデータから北を割り出している。

携帯電話が普及するまで、われわれの日常生活では、磁北を「北」として使うことが多かったが、磁石がまだ普及していない時代では、北極星や北斗七星で「北」の方位を探し出していた。また、各地の「南山」「北山」などの地形を目

印にして、文化的に「北」を割り出す方法もあった。このような日常生活における「北」は、いずれも科学の真北とはかなりの誤差があるが、一般人の日常生活への影響はそれほど大きくはない。同じく中国古代の文献に記録されている「北」も、大半が文化的な概念である。なかには科学的な要素もみられるが、精緻な科学的概念ではない。

本稿ではこのような文化的北という方位を、「北」と呼ぶこととする。

管見の限り、磁石が普及されていない中国古代において、「北」を求める方法は3つある。「太陽測定法」「帝星直接測定法」「冬至帝星軌跡平均法」である。

1. 「太陽測定法」——太陽によって「北」割り出す

中国の正統的文化において、都市の東西南北の方位を正確にしようとする際、もっとも重要視されるのは極星ではなく、太陽である。これは東洋の古代都市だけでなく、西洋の古代都市でも太陽の方位を重視していた。西洋古代・中世の都市によく使われる「オリエン特」という言葉はその表れであろう。アテネのアクロポリスに建設されたパルテノン神殿も、こうした事例の一つである。

古代中国の場合、甲骨文にすでに「量」という字があり、その字は「日」と「東」で構成され、測量とは、太陽および東方と関係があることを示している¹³⁾。「東」という漢字は「木」に従い、「従日在中」と解釈され、木のノーモンを使って方位を測量するとも理解できる¹⁴⁾。前引『書』の堯典以外に、『毛詩正義』卷第十七「公劉」には、

篤公劉，既溥既長，既景迺岡，相其陰陽，觀其流泉。

とあり、その『正義』は「以日影考之」と解釈する。すなわち、太陽の影で陰陽を測定する方法は先周時代にすでに使われていたことを示す。

『毛詩正義』卷第三「定之方中」には、

定之方中，倣於楚宮。

とあり、諸儒の解釈には差異がある。例えば、

言定星之昏，正四方而中，取則視之而正其南，因準極以正其北，（中略），度之以日影，度日出与日入之影，以知東西。

と解釈する場合もあれば、この時の恒星観測は制度・文化上において「夏之十月」が宮殿建設の時期に当てはまるかどうかということを確認するための行為だと解釈する場合もある¹⁵⁾。どのような解釈をするにせよ、この史料にある「昏」は、星を測定する時間を示す。『説文解字』日部に「昏，日冥也」とあり、つまり太陽が地平線に沈む前後の時間のことである。

これらの史料から明らかなのは、いずれにしても、都城や宮殿を建設する際に、方向を正しくする基準は太陽であったということである。これは、少なくとも西周時代には完成されていた中国の正統な文化的伝統の一つである。

太陽で北の方位を測定する方法をより詳細に記録しているのは、『考工記』である。その匠人に、

匠人建国。水地以懸，置槩（表）以懸。眡以景（影）。為規（円形）識日出之景与日入之景。画參諸日中（正午）之景，夜考之極星，以正朝夕（東西方向）。

とあり¹⁶⁾、この史料からすると、都城を建設する場合、太陽の影を利用して表（槩とも書く、つまりノーモンである、以下「表」と呼ぶ）という道具をもって、正確な東西方向を確定するのである。そして中国古代の都城建設に重要な南北方向は、太陽の影で割り出した東西方向の線に基づき、勾股弦の定理（ピタゴラスの定理）か、もしくは東西方向の直線を中分して算出するかの方法で、南北を割り出すのである。この算出した結果を校正するために、夜に天極星（帝星）を使う。つまり、『考工記』や『毛詩』注に記録された方法には、三段階の手順があることになる。まず最初に太陽と表を利用して東西を割り出し、それに基づいて数学で「北」を定める。そして最後に、夜に「極星」を使って結果を校正するのである。

さらに『周礼』「地官」大司徒によれば、この表と太陽を利用して、方位・節気・時間などを測定できるだけでなく、「地の中」(大地の中心)も測定できるとも考えられていたが、これについては本論の主旨と直接的関連があまりないため、割愛する。

表の形については『考工記』巻下匠人の注と疏に、

(前略) 於所平之地中央樹八尺之臬, 以臬(懸)正之, 眡之以其景(影), 將以正四方也。『疏』云, 置臬(表)者, 臬(表)亦謂柱也。云以臬(懸)者, 欲取柱之景(影), 先須柱正, 欲須柱正, 當以繩臬(懸)而垂之於柱之四角四中, 以入繩臬(懸)之其繩皆附柱, 則其柱正矣。然後眡柱之景(影), 故云眡以景(影)也。

とある。「中」の本字は、表に、垂直を測定するために垂らした縄が付けられた形である¹⁷⁾。また『周髀算経』巻下之一に、

以日始出, 立表而識其晷, 日入復識其晷。晷之兩端相直者, 正東西也。中折之, 指表者, 正南北也。

とある。この二つの記載を総合的にみれば、東周から前漢までの、太陽による方位確定の方法をより詳しく理解することができる。さらにこの方法と当時の天文的要素を照合すれば、この

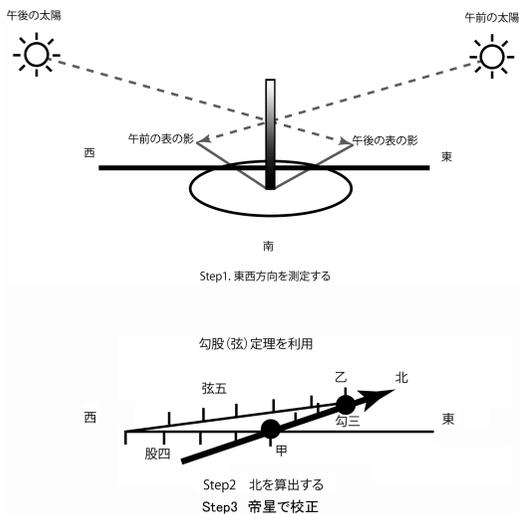


図8 「太陽測定法」による北の測定

方法が東周秦漢時代に実際に使われたのか、それとも儒学者の単なる机上論なのかを判断できる。

そこで、文献上のこの測量法を復元してみると、図8のように、まず測量地の地表を十字の溝にある水で水平に整備する。そして表を垂直に立てるために、表の八方にそれぞれ縄を垂懸し、縄と柱の間の距離が同じ(もしくはすべての縄が柱にぴったりと密着)になれば、この表は水平面に垂直に立ったことになる。そして表の西側と東側に落ちた太陽の影と円形とが交差する二点を直線で結べば、この直線は正東西方向になる。

実験考古学のテストでは、この記載通りに測定すると、工夫しない限り、測定した方位には一定の誤差が生じる。その理由は以下の三点である。

- ①表を円心とする円形や土圭を使っても、太陽の影の長さを測って方位を割り出した場合、表の影は土圭などの平面上ではグラデーション状になり、その影が実際にどの尺度まで届いているのか、はっきりわからないのである(図9参考)¹⁸⁾。
- ②後述する臼井氏の報告によれば、午前の太陽の赤経・赤緯の数字と、午後の太陽の赤緯の数字の間には一定の差がある。夏至・冬至では午前午後の赤緯の差はないが、午前と午後の赤緯の差が最大になる春分・秋分の日では、

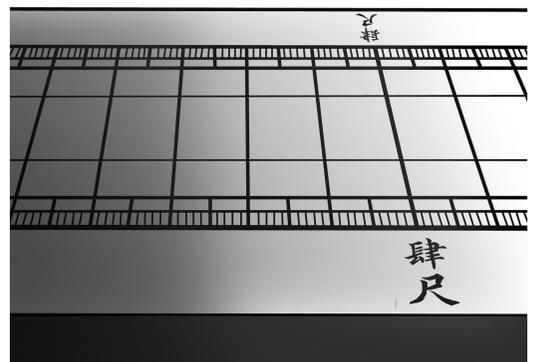


図9 土圭の上に影がグラデーション状になる

午前と午後の赤緯の差は8分前後になる¹⁹⁾。

③元の郭守敬は「旧法表端測晷，所得者日体上辺之景」と考え、ノーモン測量の誤差があることを発見している。

天文学者の銭宝琮氏は、天体の光の屈折などの様々な影響により、この観測方法で得た結果の精度は低いと指摘している²⁰⁾。しかし一方で、天文学者の陳遵媯氏は「(『周礼』に記録されている)方法では、天文南北線を確定できるが、環境や朝夕の雲霧の影響を受けやすいため、精密な測定は難しい。午前・午後の同じ長さの日晷(太陽の影)の末端をマーキングし、その二点の間の直線の中折する方法(すなわち『考工記』の方法=インディアンサークル法)で得た南北線では、その正確性は高くなる」と指摘している²¹⁾。このように、銭宝琮氏の見解は、陳遵媯氏と白井氏と異なっている。

ただ、銭氏と陳氏は天文学者であるのに、研究成果内に詳細な数字を提示していないことは非常に遺憾である。

以上が、誤差が生じる理由であるが、これらの誤差を無くすための様々な対策がある。①について、元の郭守敬は「景符」というピンホールカメラの原理のツールで解決した。すでに戦国秦漢期の墨子がこの原理を理解していたとされるが、これを方位の測定にまで使ったのかどうかは不明である²²⁾。ほかに、表の上に横木をつけてピンホールカメラの原理で影をはっきりする方法も、実験考古学では使われている。

②については、後漢以降、二日間の赤緯の差が計算できるようになったが、戦国・秦・前漢初期においては、これに関する知識の記載は見つけられないため²³⁾、前漢まではこのような誤差を考慮せずに「太陽測定法」を使っていたと考えられる。また、少なくとも秦漢時代では、後述白井氏が使用した標準偏差値による校正も行われてはいないだろう。したがって、あえてこのような校正をしないほうが、中国上古時代の実測の結果に、より近づける可能性がある。

天文観察で発見された歳差については、後漢

霊帝期の劉洪や紀元300年前後の虞喜が発見したが²⁴⁾、歳差が「太陽測定法」の影の部分に対していかなる影響を及ぼすのかについては、天文学者の計算結果を待つしかない。しかし、詳しくは次項で検討するが、帝星が歳差によって次第に真北から離れていくことから、「太陽測定法」の三番目の手順、すなわち帝星による校正が西周晩期からできなくなるはずである。このことは、戦国秦漢時代の測定に大きな問題をもたらした可能性がある。

白井氏と、宮原健吾・宇野隆夫・黄曉芬三氏は、『考工記』に記録された「太陽測定法」による実験(2003年10月)で、観測した「北」が、真北より東へ7分±3分偏るとの結果を得た。さらに白井氏は、この結果に赤緯の変化と観測の標準偏差を考慮すると、真北より東に5分の偏差が発生したと考えている²⁵⁾。ただ、当時の古代人の知識の限界からすると、補正をしない7分±3分の誤差を含んだ結果の方が、古代の観測結果により近くなるのかもしれない。関連情報が少ないにも関わらず、白井氏らが得た実験データは非常に重要である。なぜなら白井氏らの見解が正しいとするなら、太陽測定法(ただし帝星校正の部分は省く)を使えば、かなり正しい「北」の方位を得られることがわかるからである。

東周から魏晋時代にかけての中国古代都城は、北東向きが多い。白井氏は主に日本の古代都宮に着目しているため、中国の古代都城を研究する場合には、まず古都遺跡の現地で測定し、そして冬至などの古代の測定時間にしたがって測定すれば、より当時の測定結果に近くなるであろうが、現段階の白井氏の報告結果に沿えば、東周から魏晋時代では「太陽測定法」を使っていなかったと結論できる。なぜなら、図12のaとbのように、この時代の都城では、豊・阿房宮(秦の始皇帝陵園を含む)・漢の長安城以外、数多くの都城遺跡は、真北より東へ5°以上偏っているからである。

2. 「帝星直接測定法」 —— 「帝星」より「北」を割り出す

現代でも北極星を使って真北を求める場面はたびたびあるが、北極星という言葉は、『史記』天官書に存在しない。『史記』卷二七天官書には、

中宮天極星，其一明者，太一常居也。旁三星三公，或曰子属。後句四星，末大星正妃，余三星後宮之属也。環之匡衛十二星，藩臣。皆曰紫宮。前列直斗口三星，隨北端兌，若見若不，曰陰德，或曰天一。紫宮左三星曰天槍，右五星曰天棊，後六星絕漢抵營室，曰閣道。

とある。東周・秦・前漢初期において、極星で「北」を測定する場合、測定に使われる基準となる星は帝星（小熊座β）であり、現在の北極星（ポラリス = HIP7283）ではない。『呂氏春秋』卷十三有始覽に、

極星与天俱遊，而天極不移。冬至日行遠道，周行四極，命曰玄明。夏至日行近道，乃參於上。当樞之下無昼夜。

とある。前述したように、「天極（現代の赤緯 + 90°）」と「極星」（天極星 = 帝星 = 小熊座

β = HIP72607）」を分ける考え方は、戦国時期すでに存在していた。

帝星は、毎日天極を中心点として回るだけではなく、歳差の影響により次第に天極から離れていく（図10参照）。したがって、帝星で「北」を測定した場合、現代の真北とかなりの差が出ることになる。

天極は見た目上は、不動の存在である。地上から目視すれば、赤極の赤経赤緯系統における位置は、古代と現代とでは変わらない。しかし実際には、天極が黄極を中心にして周期25800年の円形運動をしているため、歳差が発生する。歳差のために、前1000年前後に帝星はもっとも天極に近く（能田忠亮氏は前1123年前後の帝星がもっとも天極に近いと指摘する）、その後帝星は次第に天極から離れていく。簡潔に言えば、地上から見た場合、この三千年の間に帝星は西から東へ移動したことになる。ところが、前漢武帝期では、帝星よりも紐星が天極に近いにもかかわらず（表1参照）²⁶⁾、I章で述べたように技術や事実に対して文化面からの頑固な慣性が働くため²⁷⁾、実際の天象に反し、人々

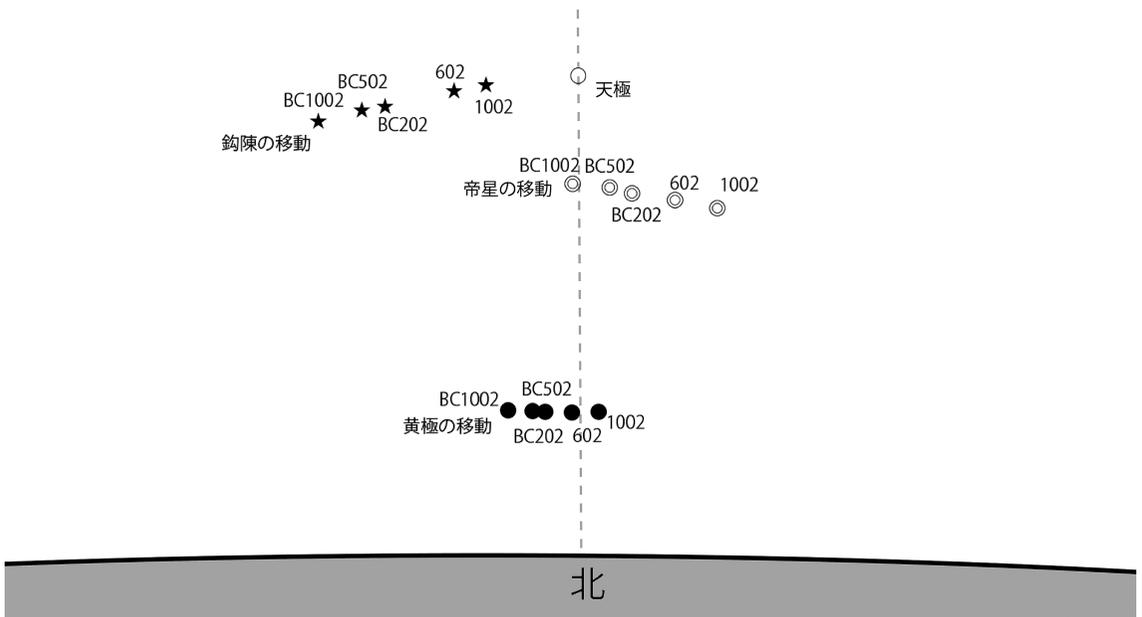


図10 帝星の移動

表1 帝星と天極の角距離

年代	前 550	前 450	前 350	前 250	前 150	前 50	紀 50	紀 150	紀 250	紀 350
帝星から天極までの角距離	7.0°	7.2°	7.4°	7.6°	7.9°	8.1°	8.4°	8.8°	9.1°	9.4°
紐星から天極までの角距離	7.5°	7.0°	6.4°	5.9°	5.3°	4.8°	4.2°	3.7°	3.1°	2.6°

出処：潘鼐『中国恒星観測史』，北京：学林出版社，1989年，65ページ。

表2 中国古代における帝星の方位角（真南は0°）

年代	前 550 年	前 450	前 350	前 250	前 150	前 50	紀 50	紀 150	紀 250	紀 350	備考
帝星の方位角(洛陽で04時に観測する場合、単位は度)	187.48	187.92	188.36	188.79	189.23	189.23	190.11	190.55	190.99	191.4	データは「ステラナビゲーター」より
最小方位角発生の時間	約 23 時				約 22 時					約 22 時	

は帝星が天極にもっとも近い星だと信じ込み、依然として帝星が天極星だと認識され続けていた。

つまり、実際の都城史を考えた場合、前1000年前後に、帝星で都城の「北」を決めて都城を作った際、その都城に軸がある場合は現代の真北と同じである。しかし、紀元350年前後になってもなお、帝星を北の基準として都城を作れば、その都城の軸は真北より東へ最大11°余り偏ることになる(表2参照)。これこそが、歴史の慣性であり、伝統を固持したことによる代償である。

天極は同じ日では、恒星との角距離は変わらないが、天極を中心点として回転するため、その角度は地面の平面角度に換算する際に、測定時刻によって平面の角度に変化が生じる。このため、古代都城の方位を観測する際には、制度上の観測時間を特定して地面における平面角度に換算しなければ、帝星の位置から測定した「北」と真北との誤差がわからない。観測時間が特定できる場合、例えば前漢時代において天官関係の記録・知識と渾儀があれば、渾儀の赤道環などから素早く天極と帝星と角距離を平面角度に換算できる。

『詩』や『考工記』に記録されている観測時間

を基準にして、「ステラナビゲーター」のデータで星の方位角を算出した歴史時期の帝星の方位角を示したものが、表2である。これによると秦の始皇帝が極廟を作ったときや、劉邦が未央宮を作ったときは、「帝星直接測定法」から算出した「北」は、真北より東へ最大7°前後偏ることになる。

戦国末期から前漢時代にかけて、帝星が天極からかなり離れているという知識自体はあったが、前述したように、文化史の世界において、特に礼儀作法の領域では、文化の頑固な慣性が必ず存在する。また、そもそも中国古代は多文化共存の社会であり、漢文化と一口に言っても古い文化と新しい文化が併存し混在することが多々あるため、新旧の文化が混合されて現れた可能性もある。

本項の内容を纏めると、前1000年前後から、天極星とされていた帝星は次第に天極から東へ離れていく。戦国末期や秦・前漢になると、「帝星直接測定法」で「北」を測ればかなりの誤差が出てしまうが、文化の慣性によって、帝星は依然として天極星であった。

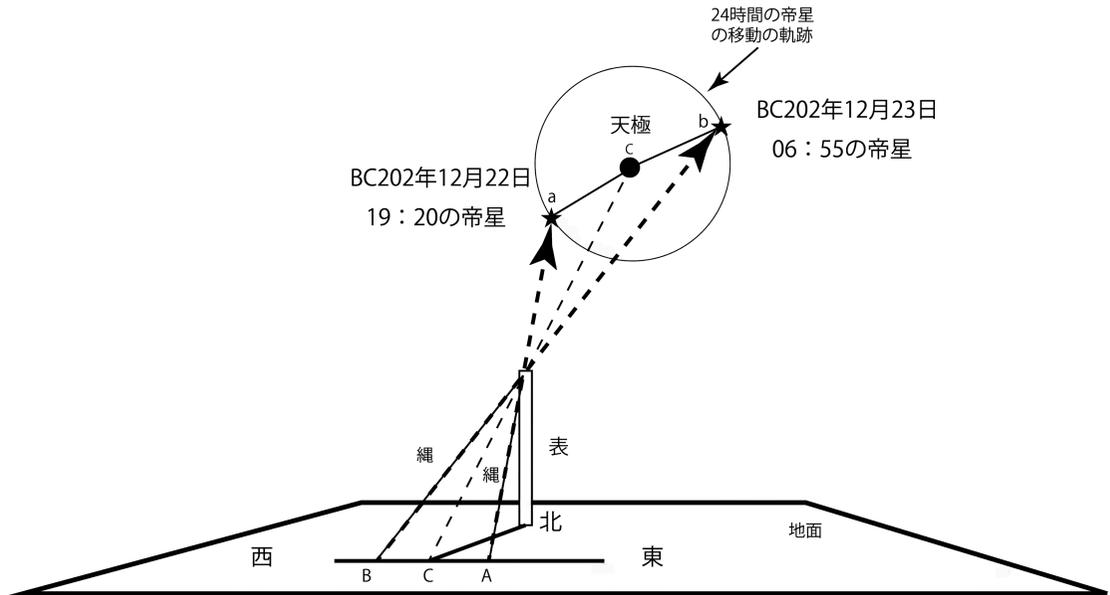


図11 「冬至帝星軌跡平均法」のイメージ

3. 「冬至帝星軌跡平均法」——冬至日の帝星の視運動軌跡より「北」を割り出す

前引『呂氏春秋』卷十三有始覽に「極星与天俱遊，而天極不移」とある。この史料から、戦国時代の秦国の上層部は、帝星が天極と一定の距離にあることを知っていたことがわかる。また『周髀算經』に、

冬至日加酉之時，立八尺表，以繩係表顛，希望北極中大星，引繩致地而識之。顛，首。希，仰。致，至也。識之者，所望大星，表首及繩至地，參相直而識之也。又到旦明，日加卯之時，復引繩希望之，首及繩致地而識。其兩端相去二尺三寸，日加卯・酉之時，望至地之相去也。故東西極二万三余里。影寸千里，故為東西所致之里数也。其兩端相去正東西，以繩至地所識兩端相直，為東西之正也。中折之以指表。正南北。所識兩端之中与表，為南北之正。

とあり、北極エリアの大きな星（帝星以外の星を使っても測量可能）で北を割り出すときの方法や測定的时间などを記録している。この測量法を本文では「冬至帝星軌跡平均法」と呼ぶ。

その測量にも表（ノーマン）を使い、そして観

測の時間は「冬至加酉之時」と「日加卯之時」である。ある学者はこの「日加卯之時」を、冬至日の卯時と解釈している²⁸⁾。もしこの解釈に間違いがなければ、この測定法は歳差とは関係がなく、夜間の帝星の視運動の軌跡によって真北を割り出す方法である（図11参照）。

つまり日没の時間（薄明が終わる時間）に帝星を一回観測し、そして翌日朝の卯の時に再度帝星の位置を観測する。二回の観測で、それぞれ表の頂点に繩を縛って帝星を観察し、帝星・表の延長線とされる繩が地面に当たる二カ所のポイント（図11のAとB）を直線で繋げば、東西方向が得られる。その線の中心点（C）と表の下端と繋いだら、南北方向になるのである。このような測定法では、「帝星直接観測法」よりかなり真北に近い「北」が得られる。

Ⅲ 文化的な「北」と中国古代の都城建設——古代都城に関わる文化的テキストと文化的実践の差異

これまで述べてきたように、文化面の「北」

には、時代や文化的伝統の違いによってかなりの差がある。図12 aとbは東周から秦漢時代までの主な都城の方位図である。もちろん、一般的に町を建設する場合、その軸線の方位は地形などの理由から正方位ではないことが多いが、「居中立極」・「面南背北」という中国古代都市の伝統があるため、都城を建設する際には、方位と「四神相応」の原則が最優先される。したがって地形が都城の方位に影響を与えそうな場合、その影響がほとんど人為的に排除されたであろう。

都城の遺跡図を測定した場合、その北が、方眼北か、磁北か、GPSシステムによる北かが、ほとんど記録されていないため、以下の作業はかなり大雑把な分析であることをはじめにお断りしておきたい。

1. 豊と洛陽韓旗故城の「北」からみた測量方法の変化

図12aでわかるように、前1000年前後、西周の都である豊の「北」は、現代の真北と同じである。そして西周の早期に築かれたとされる曲阜魯故城の方位も、基本的に現代の北と同じである。西周早期に築かれた北京房山琉璃河董家林故城は、やや西に偏っている。発掘報告によれば、琉璃河遺跡の早期の文化はかなり当地的な要素があり、宗周の文化と一定の異なりがある²⁹⁾。後述する汾水流域や中山国の都城遺跡の方位も西に偏る現象が多くみられる。「啓以夏政、疆以戎索」(『左氏伝』定公四年)の晋は、その早期において狄族の文化の影響を受けたとおもわれるので、この現象は狄族の文化との関連においてさらに研究する必要がある。

西周正統文化の都城である豊と曲阜魯故城の方位をみた場合、前1000年頃では二十八宿システムがまだ完熟していないことから、『詩』・『書』の記録と漢儒の解釈および天文史の資料を照合して考えるに、これらの都城では「太陽測定法」で方位を決定した可能性が高い。つまり、太陽と表で南北方向を割り出し、昏の時刻に帝

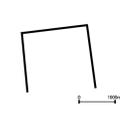
星で太陽と表による測定結果を校正するという手法である。「帝星直接測定法」を使った可能性も十分残っているが、文献記録からみれば、「太陽測定法」を使った可能性がより高い。白井氏による「太陽測定法」の判断が正しければ、太陽による観測結果は正しくても、紀元前550年時、帝星はすでに真北より東へ8°弱偏っているから、太陽と表による測定の結果を帝星の位置で校正すると、相当大きな差が出て結果が一致しなくなる。西周晩期以後になると、科学的かつ精密に測定したい場合には、「太陽測定法」はすでに使えなくなっていたのである。そうであるなら、「北」を割り出す確実な方法は一つしかあるまい。すなわち「帝星直接測定法」を使うのである。これが、東周時代の都城が真北より東へ偏った理由とおもわれる。

戦国末期になると、帝星は真北より東へ最大9°弱偏る。漢魏洛陽城の中部にある韓旗故城遺跡について、その年代と古代の名称については、様々に異なる説が多いが、西周晩期から春秋早期にかけて築かれたと考える意見が多数派であり、侯衛東氏はこの遺跡は西周晩期遷都後の西周と考えている³⁰⁾。紀元前770年前後の帝星の最大方位角はおおよそ188°で、天文観測の伝統的な標準時である「夜中」で観測すれば、帝星は真北より東へ約5°余り偏っていた。これは図面上での作業結果にすぎないが、韓旗故城の「北」もやや東へ5°前後偏っているので、このときすでに「太陽測定法」を放棄して、「帝星直接測量法」で都城の方位を決める方法を採用したのではないかと考えられる。少なくとも今のところ、地形などの理由からこの考えを否定できる材料はない。つまり侯衛東氏らの考えは、当時の天文的条件と照らし合わせると、かなりの合理性がある。

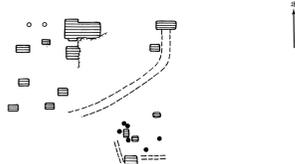
2. 関中地区の戦国・秦・前漢初期の「北」と都城の関係からみた秦と前漢初期の文化革新

東周は西周の都城を継承し、そのなかで拡大された諸侯国の都城(例えば曲阜魯故城)では、

前1000年代の都城



北京房山琉璃河遺跡

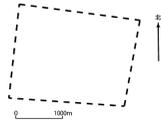


客省莊西周都城遺跡



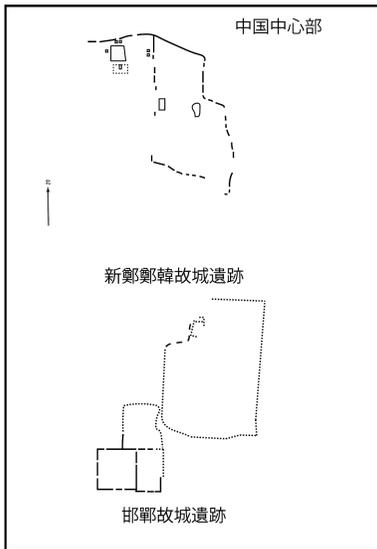
曲阜魯故城遺跡

西周晩期前後の都城



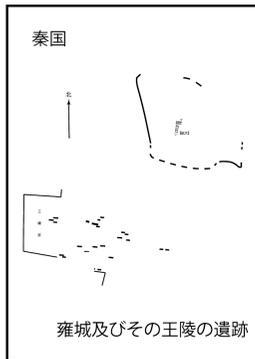
洛陽成周遺跡

東周時代の都城

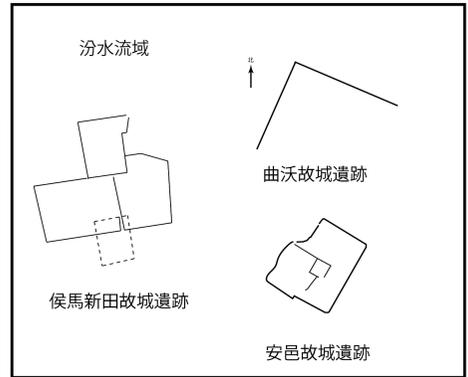


新鄭鄭韓故城遺跡

邯鄲故城遺跡



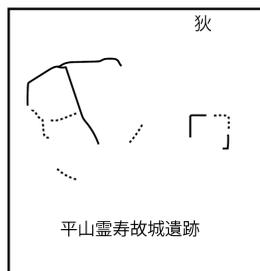
雍城及びその王陵の遺跡



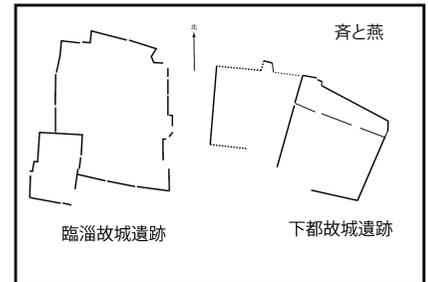
曲沃故城遺跡

侯馬新田故城遺跡

安邑故城遺跡

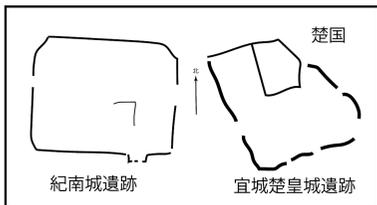


平山靈壽故城遺跡



臨淄故城遺跡

下都故城遺跡



紀南城遺跡

宜城楚皇城遺跡

※各図のスケールは異なる

図 12a 西周・東周時代都城の方位

都城の方位はすでに西周時代に決定されているので、その向きは真北になっている。しかし東周時代に新しく作られた諸侯国の都城は、前述した帝星の東への移動により、方位が大半真北より東へ偏るのである。ところが、秦の始皇帝前後の時期に造られた構造物や、前漢初期の都城・宮殿は、再度真北に向くようになる。そして魏晋時代の都城レベルの都会は、再び真北より東へ大きく偏るようになるのである。このような大きな文化的変革が何を意味するかは看過できない問題であるが、紙面の関係上、魏晋時代については別稿で検討し、ここでは関中地区の戦国・秦・前漢初期の「北」と都城の関係から、秦と前漢初期の文化的革新の一側面を見ていきたい。

図12bからみえるように、東周時代の諸侯国の都城の大半は真北より東へ偏るが、趙の邯鄲故城や鄭韓故城の方位はほとんど真北に向く。発掘調査によれば、鄭韓故城の城壁は、ほとんどが春秋戦国時代に築かれている。趙の邯鄲故城は、宮城は戦国時代に築かれたが、大城のほうはそれよりやや早く築かれたようである³¹⁾。つまりこの二カ所の遺跡は、曲阜魯故城が西周時代を継承してきたものとは異なり、ほとんどが東周時代に築かれたのである。前述したように、この時代では「太陽測定法」や「帝星直接測定法」で真北を測定できるが、校正できない可能性が高い。一方、韓・趙・魏は、当時において天文学やその他の文化がもっとも発達していた地域でもあった。『史記』卷二七天官書に、

昔之伝天数者、高辛之前、重・黎。於唐・虞、義・和。有夏、昆吾・殷商、巫咸。周室、史佚・苒弘。於宋、子韋。鄭則裨竈。在齊、甘公。楚、唐昧。趙、尹皋。魏、石申。

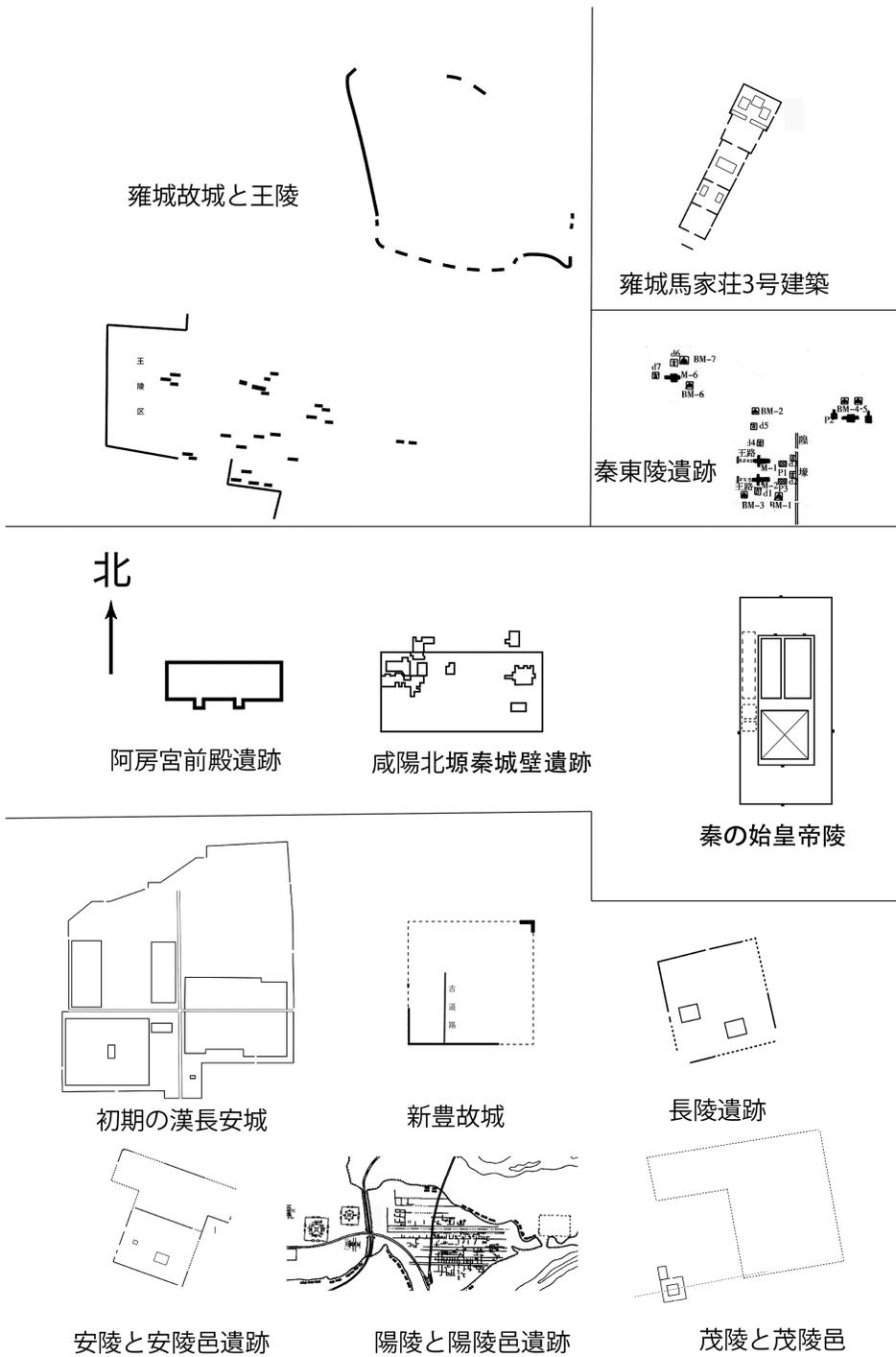
とあり、そして前述したように、魏の都の大梁は星の名前にもなっている。これらのことは、東周時代の鄭(韓)・魏・趙の天文学における知識技術の高さを示している。そして拙稿「雑考：式盤・式図と初期漢長安城の「象天法地」—術数・文化伝承からみた初期漢長安城の都城構造

の由来—」³²⁾でも述べているように、秦と前漢初期の政治文化は魏や荀子学派と密接な関係があり、そもそも呂不韋は韓の陽翟の出身である(ただし、濮陽説もある)。

図12bからわかるように、春秋戦国時代の秦の都である雍城遺跡は不規則な平面になっているが、そのなかの宮殿・宗廟建築はいずれも真北から東へ偏っている。しかし、咸陽塬にあるⅠ号・Ⅱ号・Ⅲ号秦陵では、Ⅰ号とⅡ号の秦陵の東の方位は東に偏っているが、Ⅲ号秦陵の方位は正しい東西方向である。一般的にⅠ号の秦陵は秦の恵文王の陵、Ⅱ号秦陵は秦の悼武王とその夫人の陵とされるが、Ⅲ号秦陵の被葬者の身分ははっきりしない。咸陽にあるⅢ号秦陵と芷陽にある秦の東陵の時代になると、秦人は正確に東西南北の方位を決められるようになり、文化が飛躍的に発展したことを示唆している。そして秦の始皇帝の都城建設と始皇帝陵もこの新しい文化を引き続き、東方諸国と異なり、建造物の方位を正しくして、形状が簡単明快な都城と墓園を作るようになったのである。これは上述した『呂氏春秋』にある「天極」と「帝星」に対する理解と関連する。つまり、この時期になると、古い伝統は破棄され、秦人による新しい宇宙論的世界観が形成されたのである。このような異文化・新文化を受容する姿勢は、秦人が天下統一をしていく際の精神的構造の一つの側面を示しているとおもわれる。

具体的な観測方法としては、もちろん、天樞を天極星として使った可能性もあるが(表3は本稿に關係する各年代の天樞の方位角)、文献上の記録はない。おそらく前引『呂氏春秋』と『周髀算經』の記録のように、「冬至帝星軌跡平均法」で正確な真北を割り出したのではないかと推測する。

そして漢の劉邦が都城を建設する際、張蒼のような天文曆法に精通する人はともかくとして、秦の軍匠出身の陽城延が秦で生み出された新しい観測方法を知っていた可能性は大きいだろう。すなわち、秦の地で開花した新しい文化が継承され、方位の正しい長安城や新豊(秦の



※各図のスケールが異なる

図12b 秦と前漢初期の都城と陵墓の方位

表3 古代洛陽からみた帝星の方位角(真南は0°)

単位は度	「昏」の時	「夜中」の時	「晨」の時	最大の時	最小方位角発生 の時間
前1000年	172.15	183.84	187.6	185.58	約0時
前770年	172.2	185.43	188	188	約6時
前202年	172.6	187.91	189.13	189	約23時
紀317年	173	190.64	190.23	191	約22時

酈邑)が築かれたのである。

だが、劉邦集団は反秦的楚文化の集団である、秦の文化を受け入れる際に、当然ある程度の動揺があっただろう。このために、劉邦の長陵・恵帝の安陵・景帝の陽陵と、それぞれの陵邑の方向は、北が西に偏る場合もあれば(長陵と安陵)、その軸が正方向に向く場合もある(陽陵)。武帝時代からは、ようやく皇帝陵の「北」が西寄りの形で固定されたようである。しかし、儒家一尊の風潮のなかでは、実際の科学的な測量よりも、儒教の「礼」や、経学の学閥や書籍のなかの伝統の方が強くなった。儒学者からみれば、『呂氏春秋』と『周髀算経』に記録された科学的な観測法はむしろ「邪道」で、科学的・実践的に破綻した「太陽測定法」が周の伝統として再度重視された。そのために、魏晋時代の都城の「北」が再び真北より東へ偏る事例が多くなっていくのではないか。後漢前期から東晋時代までの都城の方位については、筆者はすでに「中古中国制度・礼儀与精神生活国際学術研討会」にて意見を発表し³³⁾、後日論考を上梓する予定である。

【図の出典】

図1 平勢隆郎『中国の歴史2 都市国家から中華へ 殷周 春秋戦国』(講談社学術文庫, 東京: 講談社, 2005年)第三章から第五章の内容に基づいて筆者作成。

図2a 妹尾達彦「帝国の宇宙論」, 水林彪など編『王権のコスモロジー』, 東京: 弘文社, 1998年4月所収, 238ページ図1をもとに筆者作成。

図2b 凱文・林奇『城市形態』, 北京: 華夏出

版社, 2001年6月, 10ページ図9から引用。

図3~11 筆者作成。星図の部分は「ステラナビゲーター11」(AstroArts Inc.)のデータにより作成。

図12a・12b 中国社会科学院考古研究所編『中国考古学 两周卷』, 北京: 中国社会科学出版社, 2004年および徐龍国『秦漢城邑考古学研究』, 北京: 中国社会科学出版社, 2013年から諸図を引用。

注

- 1) M.カステル(Manuel Castells)著, 山田操訳『都市問題——科学的理論と分析』, 東京: 恒星社厚生閣, 1984年。第一章「都市化の歴史的過程」, 第一節「都市現象, その概念的規定と歴史的現実」を参照。
- 2) 普魯塔克著, 席代岳訳『希臘羅馬名人伝』(和訳名『ブルタルコス』ロムルス伝)上, 第一篇第二章羅慕拉斯(ロムルス)11, 長春: 吉林出版集团有限责任公司, 2009年, 47ページ。日本語訳は筆者による。
- 3) アナクシマンドロスの著作は現在まで伝わっていない。讓・皮埃爾・維爾南(Vernan, J.P.)『希臘思想的起源(ギリシア思想の起源= Les Origins de la Pensee Grècque)』第八章「世界的新形象(世界の新しいイメージ)」, 112ページやディオゲネス・ラエルティオス著, 加来彰訳『ギリシア哲学者列伝』, 岩波文庫, 第2巻第1章, 岩波書店, 1984~1994年を参照。
- 4) フランチェスコ・リッツァーニ, ラウラ・リッカ著, 野村優訳『イマーゴ・ウルピス: ローマおよび京都の神話と歴史のあいだ』, 『立命館産業社会論集』第49巻第1号。
- 5) エルンスト・カッシーラー『人間——シンボルを操るもの』, 岩波文庫, 東京: 岩波書店, 1997年。
- 6) 陳夢家氏は, 卜辞にある「天」に「上天」の意味はなく, 神としての「天」の概念は周人がつくったも

- のとしている(『殷墟卜辞総述』第十七章宗教, 北京: 科学出版社, 1956年, 581ページ), 許倬雲氏は卜辞にある「上下」の「上」は、「天」のような神の意味が含まれていると考えている(『西周史(増訂本)』, 北京: 生活・読書・新知三聯書店, 1994年, 103-104ページ)。筆者は許氏の考えに従う。
- 7) 黄懷信・張懋鎔・田旭東『逸周書彙校集釈』, 上海: 上海古籍出版社, 1995年, 五〇二~五一三頁。
 - 8) 平勢隆郎『中国の歴史2 都市国家から中華へ殷周 春秋戦国』第三章「華夏」の源流と夏殷周三代, 第四章「戦国諸国それぞれが語る夏殷周三代・第五章夏王朝・殷王朝の史実」東京: 講談社, 2005年。
 - 9) 潘明娟氏「地中・土中・天下之中概念の演変与認同——基於西周洛邑都城選址実践的考察」, 『中国史研究』2021年第1期。
 - 10) K.C.Chang *Art, Myth, and Ritual the Path to Political Authority in Ancient China*, Harvard University Press. 1983. P20.
 - 11) 趙永恒『周髀算経』与陽城』『中国科技史雑誌』2009年第1期。
 - 12) 「道」と「太一」の関係については, 李小光「道与太一関係論略」『四川師範大学学报』(社会科学版) 2009年第5期を参照。
 - 13) 于省吾「积量」, 『甲骨文集林』, 中華書局, 1979年, 四一四頁。
 - 14) 段玉裁『説文解字注』第六篇上東部, 上海: 上海古籍出版社, 1981年。四九七頁。
 - 15) 李学勤主編『十三経注疏』三『毛詩正義』(上), 北京: 北京大学出版社, 1999年, 196-197ページ。
 - 16) 聞人軍訳注『考工記訳注』卷下匠人, 上海: 上海古籍出版社, 2008年, 111ページ。
 - 17) 肖良瓊「卜辞的「立中」与商代的圭表測景」『科技史文集』第10輯, 上海: 上海科学技術出版社, 1983年。
 - 18) 肖堯「登封四丈高表与圭表測影」『自然科学博物館研究』2020年第4期。
 - 19) 白井正「京都の天文学【1】 平安京の方位はどうやって決められたのか」『あすとろん』1号 https://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp/hosizora/astron/astron1/astron1_P11-15.pdf (採集日: 2021年6月17日 21:15)。
 - 20) 錢宝琮『蓋天說源流考』, 『科学史集刊』1958年第1期。この方法に関してはほかに, 高平子氏「論圭表測景」(『宇宙』第8巻第1号, 1937年1月)などの研究がある。その内容は次注陳遵媯『中国天文学史』などに引用されているが, 原文の入手困難に
より詳細が確認できない。
 - 21) 陳遵媯『中国天文学史』, 上海: 上海人民出版社, 2006年, 104ページ。
 - 22) 陳遵媯『中国天文学史』, 上海: 上海人民出版社, 2006年, 105ページ。
 - 23) 陳美東「中国古代太陽視赤緯計算法」『自然科学史研究』第6巻第3期, 1987年。横尾廣光「ノーモンによる南北軸決定精度と国分寺遺跡での活断層による方位変動」『千葉商大紀要』第47巻第2号。
 - 24) 『晋書』卷十七律曆中。
 - 25) 白井正「京都の天文学【1】 平安京の方位はどうやって決められたのか」『あすとろん』1号 https://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp/hosizora/astron/astron1/astron1_P11-15.pdf (採集日: 2021年6月17日 21:15)。
 - 26) 潘鼐『中国恒星観測史』, 北京: 学林出版社, 1989年, 65ページ。
 - 27) 歴史発展における慣性について, 国際政治学者の閻学通氏は「人間が歴史の慣性より, 強い力が創出されるまで, 歴史は既存の軌道を走っていく」としている(閻学通『歴史的慣性——未来十年の中国と世界』, 北京: 中信出版社, 2013年, XⅢページ)。閻氏のこの予測は本稿と直接関係しないため, ここではこれ以上触れないが, 歴史の発展においては, たとえ新しい社会思想と技術が現れても, 文化面での頑固な慣性があるという考えは正しい。
 - 28) 聞人軍訳注『考工記訳注』卷下匠人, 上海: 上海古籍出版社, 2008年, 111ページ。
 - 29) 北京大学考古学系・北京市文物研究所「1995年琉璃河周代居址発掘簡報」, 『文物』1996年第6期。
 - 30) 侯衛東「論西周晚期成周的位置及营建的背景」『考古』2016年第6期。
 - 31) 中国社会科学院考古研究所編著『中国考古学 两周卷』, 北京: 中国社会科学出版社, 2004年, 235ページおよび238ページ。
 - 32) 拙稿「雑考: 式盤・式図と初期漢長安城の「象天法地」—術数・文化伝承からみた初期漢長安城の都城構造の由来—」, 『阪南論集』人文自然科学編, 第56巻第2号。
 - 33) 拙稿「中国古代社会天文学与戦国魏晋南北朝都城的「中」・「極」・「北」概念」, 中国社会科学院学部主席団・中国社会科学院古代史研究所『中古中国制度・礼儀与精神生活国際学術研討会 會議論文集』, 北京, 2021年8月, 192-198ページ。

(2021年11月19日掲載決定)

